

## ニュツサのグレゴリオスによる説教「施し」

土 井 健 司

### はじめに

キリスト論論争に一定の成果を示した四五一年のカルケドン公会議の決議の中に、救貧施設というものが司教の管理下に置かれるべきであるとの一条がある。

「救貧施設(Hospitium)、修道院、教会堂の司祭は、聖なる父たちの伝統に従ってそれぞれの町の司教の下でその権利を保持するものであり、決して勝手に自分の司教に逆らつてはならない<sup>①</sup>」。

公会議の条文の中でこのように言及される以上、「救貧施設」というものが当時一般に普及していたことが窺われる<sup>②</sup>。ビザンツ帝国における病院史を書いたティモシー・ミラーによると、こうした救貧施設はビザンツにおける病院の起源を含め、四世紀に生じたものである<sup>③</sup>と言ふ。四世紀にはじまったこうした施設が、東方から徐々に広まり、五世紀半ばには各地に見られるまでになった。キリスト教が国教化される四世紀は、こうした救貧施設に止まらず広く貧困というものに注目が集まり、ローマ帝国に新しい慈善の制度が生まれた時代であつたと言われる<sup>④</sup>。

ここに翻訳を試みるものは、四世紀ニユッサの司教グレゴリオスの手による説教「施し」(De beneficiata)である。<sup>(5)</sup> 右に記したような四世紀における慈善を勧める説教の一つに数えられる。この翻訳のため底本としたのは標準的なブル社刊のグレゴリオス著作集に収められているヘック版である (A. van Heck (ed.), De beneficiata, GNO IX, Sermones, Leiden: E. J. Brill, 1967, pp. 91-108)。既訳としては「シーニユ教父著作集」に掲載されているラテン語訳の他、独語訳と英語訳とがある。<sup>(6)</sup> 表題について、シーニユ教父著作集では De pauperibus amandis oratio I とされていたが、校訂者ヘッンは *pepi eûnoúias* = De beneficiata を選んでいる。写本に見られる他の候補としては *φιλανθρωπία* (貧者への愛) と *νηστεία* (断食) の語が見られる。<sup>(6)</sup> まとめると次のようになる。

A, L, F の三写本 *pepi eûnoúias* (施し)

S, Z の二写本 *pepi φιλανθρωπίας και eûnoúias* (貧者への愛と施し)

P, H の二写本 *pepi νηστείας και πρῶτοτροφίας* (断食と救貧)

J・ダニエルによると、この説教は三八二年四旬節の期間になされたという。<sup>(9)</sup> 場所はニユッサの町と思われる。貧者への施しを勧める実践的、倫理的説教である。なお本文中に「L. 53」などの挿入を加えたが、これは、文章構造の違いから若干異なるところもあるが、原典テキストの頁数を記したものである(「L」は出版地レイデンのこと)。また段落は原典テキストに従っているが、小見出しは読みやすさを考えて訳者が加えたものである。そして訳者による補足は「L」に入れ、また適宜ギリシア語も( ) に入れて示した。そのさい一語のものはその原形を示し、複数の語からなる場合は元のままで記した。

## 一、はじめに

[L. 93]この教会の指導者、また真実の宗教と有徳の生の教師たちは、文字の教師、初等学問の教師と多くの点で似ています。というのもこの人たちは幼児や未だはつきり話せない子供を父親から受け取ると、直ちに学業の完成へと導くのではなく、最初は蜜ろうに「アルファ」を刻み、アルファベットの次はその名称を知るよう教え、書かれた手本によつて手を習練し、その後音節に慣れさせて名称の次に発音を教えるからです。そのようにまた教会の指導者は最初聴講者を教えるの基本的事項へと導き、少しづつより完全なものの認識を与えていくのです。

そこで、私どもはこれまで二日の間、喉と腹の快樂欲を節制してきたのですから、今日もまた私がおなじみのこと、例えば肉の上等の部分を控えるとか、下品な笑いを催させる葡萄酒や悪酔いを避けるとか、また料理を「[L. 94]」止めさせ、酌取りの動く手を止めるといったことを言うだろうとは思わないでください。なぜならこれらのことはもう十分語ってきたし、またあなた方は実践によつてこうした忠告を守っていることを示して下さったからです。そこで更に進んで、最初の教えを立派に訓練したあなた方には、より偉大でいつそう人間的な教えに与らせることが残されているのです。

## 二、本当の断食

魂についてなされる諸悪からの回避とは、非肉体的な断食であり、また非質料的な節制のことです。この回避の為にこそ、これまでのような食物の回避が命じられたのです。そこで悪を慎しみ、異質なものへの欲望からは節制し、不正な所得をさげ、マモンという金銭欲に餓死して、決して暴力と搾取によって家に宝をためてはなりません。肉を口に運ばなくとも悪意で兄弟を傷つけるなら、何の益がありますか。また自分のものを食せずとも、貧者のものを不正に得るなら、何の得があるのですか。また水を飲んでも策略を廻らして悪意から血をかき求めるなら、一体何の敬虔なのでしょう。またユダでさえも十一人の弟子と共に完全に断食しましたが、彼は金銭欲を殺さなかつたので、絶食によって救済へと助けられることはありませんでした。悪魔（*Satan*）も食事をするのではなく（というのも霊であり、肉体がないので）、悪意によって至高の方から離れ落ちたのでした。同様にまた、それぞれの悪霊も何か料理を自分に供することもせず、また泥酔や酔払いという告発を受けることはなく（なぜならその本性が彼らを食事に参加することから切り離します）、「悪魔と」同じ様に昼となく夜となく空中をさまよい、悪を為し、悪に仕えるものとなり、熱心にわれわれに對する陰謀をめぐらしています。「T. S.」そこで、われわれ人間が神との親近性を有するよう望むならば、彼らは善への親密性からは離れ去っているので、ねたみとそねみにより霧散してしまふのです。

それゆえ、愛智の流儀がキリスト者の生を訓導するように、魂は悪による傷を避けるように。①②というのも酒と肉を断つても私どもに意図的な数々の罪の責任があるとすれば、私どもは外見とは似ていない内的状態を有するのですら、水や野菜、血の染みのない食卓が私どもを利することはないと私はあらかじめ宣言し、証言しておきます。つま

り、魂の清浄のためにこそ断食が命じられたのです。そこで、魂が自由選択<sup>13</sup>とその他の諸々の働きによつて汚されているというのに、除去のかなわない多くの泥土を耕す魂のそばで、私どもは無益に水を飲み浪費するのでしょうか。あるいは、もし理性が清らかでないならば、肉体的断食の利益は何でしょうか。騎手の気がおかしくなれば、力強い戦車とよく調教された四頭の馬があつたとしても、何の益もありません。<sup>14</sup>舵手が酔払えば、よく調整された船の利便さは何でしょうか。断食は徳の土台です。丁度、家の土台や船の竜骨は、たとえ非常にかつしりとすえられたとしても、それに続くものが知識を持つて建立されなければ何の益にもならないように、そのような節制も他の義を育み、それに続くものを受容しないなら、何の益にもならないのです。「神への畏れ」によつて教育されて、舌がふさわしきことを語り、空しい事を話すことのないように。またふさわしい時と「己の」分を知り、必要な言葉と「I's」的を射た答えを知るように。正しい抑揚で話し、話している人には決して極端な仕方であいさつしないように。このゆえに、無秩序で混乱した「音声」を発しないようにと、舌をアゴに結びつける非常に細いあの皮を、「くつわ」と言います。美しく語り、口汚く話してはなりません。歌うように話し、悪口を言つてはなりません。汚れた言葉を避け、べらべらおしゃべりをしてはならないのです。不用意な手を鎖の如く神への想念 (thinking to God) に結びつけなさい。釘「を打つ」前に汚口と平手打ちが私どもの子羊を見下して扱つたので、<sup>15</sup>私どもは断食をします。それゆえ私どもキリストの弟子は、決してユダヤ人の流儀を求めないでおきましょう。というのも、もし私どももその様であるならば、イザヤが私どもに言うことでしょうか。<sup>16</sup>「なぜおまえ達は断食をして、いさかひや戦いをするのか。またなぜ拳を使つて虐げられた者をなぐるのか」。そして同じ預言者から偽りのない、清らかな断食の行爲もあなたは学びなさい。「不正な絆をすべて解き放ち、暴力による関係の絡まった結び目をほどきなさい」。「飢えた者におまえのパンを分け与

え、家のない貧者をおまえの家の中に入れなさい」。

### 三、貧者の姿と施し

今の時代は数多くの裸者と無宿者をわれわれの許に運んできました。なぜなら沢山の流浪者がわれわれそれぞれの門前にいるからです。寄留者や移民は止まず、いたる所で整列して差し伸べられる手を目にする事ができます。この人々にとって家とは野外の空気、宿とは回廊であつて、街路、広場の中の一層人気のない場所なのです。夜ガラスとふくろうのように、穴の中にも隠れ住んでいます。彼らにとつて衣服とは全面穴だらけのポロ切れであり、その作物は隣れむ者たちの親切です。「L.S.」施してくれる者より与えられたものがあれば、何でもそれが食事となり、動物のように泉の水が飲み物、両手でつくったくぼみがコップである。さらにそのポケットが金庫なのですが、それは破れておらず、中に押しこめられたものを受け止めている場合の話です。両ひざをしつかり合わせたものが食卓であり、地面がベッドです。川や池が風呂ですが、そもそもそれは神が万物に対し共通して、秩序を立てずに与えてきたものです。彼らにとつて生活は追放された者のようであつて野性的である。しかし、はじめからそうなのではなく、不運と必然からそうなつてしまつたのです。

断食しているのだから、この人々を助けなさい。兄弟の中で不運な者たちについて気前よく (generous) なりなさい。自分の腹のもとから離れたあなたならば、飢えた人に与えなさい。「神への畏れ」が義の平等化となるように。思慮深い節制によつて、これら相対立する情念、すなわち、あなたの飽食と兄弟の飢餓の双方を癒しなさい。医師もま

たそのようにするものです。あるものを空にし、あるものを満たし、それらの増減によって各人の健康が守られます。あなた方はよき助言に従いなさい。その言葉が富者の門戸を開けるように。忠告が貧困者(πτωχοῦ)を持てる者へと導き入れるように。論議だけが嘆く者を満たすことがないように。永遠の神の御言葉(λογος)が、僕の言葉(λογος)を通して、彼らに家と寝台と食卓とを与えますように。こうした使用に利するものを、あなたはその富で耕しなさい。彼らに加えて別に極貧者(τεροχοῦ)がいますが、それは数多くの病弱で寝たきりの人々のことです。<sup>19</sup> あなたがたは皆、それぞれこれらの近隣の者(γείτων)のため骨をおりなさい。あなたの隣人が他人によって世話されているのを放っておかないように。他人があなたの側にいる宝「**II 貧者**」を取ってしまったくないように。不幸な人を黄金のように抱え込みなさい。不幸な人をあなたの健康として、子供、家族、家全体の保証として腕に抱き込みなさい。<sup>20</sup> 「**I. 38**」貧困に加えて病気であるのが極貧者です。というのも、困窮していても健康な者は戸口から戸口へと渡り歩き、持つ者のところへ行くか、あるいは三叉路の所で通行人に呼びかける。しかし病気に拘束されてきた者は、ダニエルが穴の中に閉じ込められたように、せまい部屋、またせまい角に閉じ込められ、ハバククのような敬虔で貧者をいづくしむ人(τὸν εὐλαβῆ καὶ ἀλότρωτον)を待っている。<sup>21</sup> 憐れみを通して預言者の友となりなさい。素早く養育者となつて、必要とする人を直ちに助けなさい。与えることは決して損失ではない。恐れてはいけなさい。憐れみの果実は多様な芽を出させます。与えることで「種を」まきなさい、そうすれば浄財で家を満たすことになるでしょう。

しかしあなたはこう言うでしょう。私も貧しい、と。その通りでしょう。ならば与えてもらいなさい。そして、あなたも持っているものを与えなさい。というのでもできる以上のことを神は求めません。あなたはパンを、別の人はワインカップを、そして他の人は衣服を、こうして一人の不幸は連帯し援助することで解消される。モーセは神殿の費

用を一人の祭司から受け取ったのではなく、民全体から受け取りました。というのも富者の中のある者は黄金を彼の所に持つて来て、別の者は銀を、貧者は皮を、またより一層貧しい者は山羊の毛を持つて来たからです。<sup>22</sup> またあなたは、やもめのクアドランスが富者の寄進物をどれほど凌ぐのを知っているのですか。<sup>23</sup> 一方は持っているものすべてを空にし、他方は持っているものの中から少しを出しただけだからです。

#### 四、貧者は神の御顔を備えている

見捨てられ横たわっている人たちを、価値のない者として見下してはなりません。この人々が何者であるのか考えなさい。そうすればその価値を認めることでしょう。すなわち、彼らはわれわれの救い主の顔を身に付けていたのです。<sup>24</sup> というのも人間愛 (εὐαγγελία) に満ちたお方は、「19」彼らに御自身の顔を備えられたからです。それは、彼らが無情で貧者嫌悪の輩 (μισοπτύχοι) <sup>25</sup> をその御顔を通して (彼らを抑圧する者たちに向かつて王者の姿を提示する者のように) はずかしめるためです。つまり、力ある者の姿によって彼らが軽蔑した者をはずかしめるためです。彼らこそ将来の善の分配者であり、御国の門番、よき人々に門を開け、気難しく人間嫌悪の輩 (μισοπτύχοι) <sup>26</sup> には閉じてしまいます。彼らは激しい告発者であり、またよき弁護士です。彼らは弁護し、あるいは告発するが、いつでも弁論するのではなく、審判者に見られるのです。なぜなら、彼らに生じた行為は、あらゆる告発者の叫び声からその心を見抜く方 (καρδιολογῶντις) <sup>27</sup> の面前で一層明瞭だからです。

このため神の福音書を通してわれわれに向かつて、あなた方もしばしば聞いた恐ろしい法廷も描かれました。<sup>27</sup> とい



うのも、そこで彼らは人の子を觀、この人の子は天から来て、地上のように天空を歩み、何千もの天使に護られ、次に栄光の玉座に挙げられ、王自身の前に座るのです。あらゆる民族は再生し、太陽に照らされ、この空氣から引き上げられると、二つの部分に分けられ、裁きの場へと連れて行かれるのを人々は觀ます。そして右側から来た者たちは「子羊」と呼ばれ、また、もう一方にいる者どもは（その生き方が似ていることからその呼称を引き付けて）「山羊」と呼ばれるのを耳にしました。さらに、[L. 100]そこで裁かれる者どもに向かった審判者の言葉と、王に對する罪について有罪とされた者どもの応答があり、そしてそれぞれに對してふさわしいものが割り当てられます。つまり、最善の生を送った者たちには王国の享受、しかし人間嫌悪の悪人に對しては炎の罰、しかもその罰の永続なのです。

## 五、神こそが最初の施す者

これらのことすべては注意深く書き記されています。この法廷は御言葉によつて正しく、またありありと詳しく、われわれに向かつて描かれていのです。それは施しの有益さをわれわれが学ぶために他なりません。なぜなら人生を包み込む者と貧しき者たちの母、そして富者の教師の三者は同じ方であつて、よき養母、老人の介護者、必要なものの宝庫、不幸な者たちの共同避難所、あらゆる齡と不幸に向かつて自ら摂理を配剤する方だからです。虚しい闘技主催者は自らの面目を示そうと、ラツパに合せて闘技学校の所屬者すべての人に富の分配を約束するものですが、そのように施しの業も困窮と災難の人すべてを自らに呼び寄せ、しかもやつて来た者には毆打の名譽ではなく、不幸からの癒しを分配します。その施しはあらゆる譽むべき実践よりも優れたものです。またそれは神の仲間、善の友で

あり、善なる方と多くの類似性を有しています。それ故あらゆるものに先立つて神ご自身が、善にして人間愛の実践を「自らの手で」われわれに向かつて働く者としてあらわになるのです。というのも大地の創造、天の秩序付け、時間間の規則正しい交代、太陽の熱と水の冷たい生成、これらそれぞれすべてを「10」神ご自身は自分に対してではなく（なぜならその方は何ものも欠けていないから）、われわれのために継続して働いて下さっている。その方は人間の食物の見えざる農夫、時期を心得た種まき人、そして賢明で（熟練した）農水管理者です。というのもイザヤによれば、その方は種をまく人に種を与え、また大地に向かつて今の時期は雲からやさしい水を注ぎ、再びあぜのみぞに向かつて怒り狂った水を注ぎかけるからです。作物が育ち、緑になったものが過ぎ去る頃にはいつも「その方は」天全体から雲を散らし、覆いからあらわになつた（温かく燃えるような光線を拡げる）太陽をそれら作物に備えてくゞさいます。そうしてとうもろこしの実が適時成長して、最後に切り取られます。「その方は」また四季を通してブドウを育て、渴いた者に飲み物を備えて下さる。また私どものためにさまざま種類の家畜を育て、人間の許には豊かな肉が存在する。そしてその皮は羊毛を生産して、覆いを供給し、そしてサンダルをわれわれのために完成する。神こそが施しの最初の発見者であり、先述のように飢えた者を養い、渴いた者に飲ませ、裸者に服を着せるものと理解されるのです。

さらに、どのようにして「神が」不幸な者を癒すのかを聞きたいのであれば次のことを学びなさい。ハチが蜜蠟と共に蜜を作り出すように働いているのは誰か。また何者が松やテレピンチン、マステックの木にあのような油いっぱい樹液を垂らすようにしたのか。何者がインド人の地を乾燥した香りのよい果実の母として作ったのか。何者が「102」苛酷な肉体労働から「人を」保護するオリープを生み出したのか。誰がわれわれに根と草（飼料）の識別、そし

て根や草の中の性質の知識を与えたのか。誰が健康を作り出す医術を示したのか。誰が地上から温泉の泉に到達したのか。その泉はわれわれの冷えた湿った所を治し、またかわいて固まった所をほぐしてくれるのです。そこでバルクに従つて次のように言うことは時期になつていきます。「その方は知識のすべての道を見出し、それをその子ヤコブにお与えになつた」(バルク三章三七節)。したがつて火を使った技術、火を使わない技術、また水を使った技術など無数の仕事の発見があつた。それは生活に必要なものによつて奉仕することが、欠けるところなく完成されるためなのです。神はこのように施しの最初の発見者であり、われわれに必要なものを豊かに有し、そして同情深い (Gunschtig) 指揮者なのです。

## 六、神の模倣としての施し

われわれは、至福で不死なる方への模倣が死すべき人間に近づき得る限りで、われわれ自身の主であり創造者である方を求めるようにと、聖書の一つ一つの文字に従つて教育されています。すべてを適切な享受のために蔑み、或るものはわれわれ自身の生に割り当て、或るものは相続人たちに分配します。ところで、いかなる言葉も決して不幸な人々や貧しい者たちのよき配慮とはなりません。おお、無慈悲な想いよ！ 人間が、パンに欠乏して食物という生命の火を灯す必要不可欠なものをもたない人間を「ただ」眺めて<sup>(33)</sup>いる。その者は熱心に助けることも救いの手をさしおへることもせず、まるで花盛りの木が水不足で哀れにも枯れてしまふのを見過ごすようであり、しかもその水をあふれるばかりに多量に有し、手許のものから勇氣づけ「の水」を多くの人々に流し与えることができるのに、です。丁

度一つの泉の流れは「L. 103」大きな開かれた平原を平らにするように、一つの家の富は、貧しい民を救済するのに十分です。ただもし意図的に石のようにケチで非社会的になった富が出口の所に落ちてしまい、自身の流れを（押し戻さない）ならばの話です。

われわれは肉体において生きるだけでなく、神においても生きましよう。というのも贅沢な食べ物、享受することを通して中に入つて、肉体の小さな部分、つまり喉をいやすが腹の中でその質料を腐らせ、その結末は便所にあります<sup>(註)</sup>。憐れみと施しとは神に喜ばれる事であり、またそれらがまさに人間の内にある場合には、その者を神化させ（*deify*）、善の模倣へと刻印し、その結果、第一の混じり気のない、そしてすべての知性を超えて行く存在の像が存在するようになるのです<sup>(註)</sup>。では、「憐れみと施しとは」その努力のどのような結末を約束しているのか。この世においては美しい希望と「心を」明るくする期待、またあの世においては、この流れる肉体を脱いで不滅の肉体を別に着る時に至福なる生です。それは語り難く破壊できない、一種驚くべき、今はわれわれに知られていない喜び（*ecstasy*）において備えられたものなのです。

## 七、施しの勧め

それゆえ、あなたたちすべては知性的なものとして創造され、理性、即ち神的なものの解釈者なのです。教師「である神」を有する者たちは、決して時間的なものに捕らえられないようにしなさい。獲得されたものとしては、決して後々まで残らないものを獲得しなさい。すなわち生活上の使用に限度を定めなさい。万物は決してわれわれのもの

ではない。あなた方は、神の愛すべき貧者の一人でありなさい。なぜなら万物は神、即ち「われわれに」共通の父のものであつて、われわれはいわば同族の兄弟 (adelphoi kai thymoi) だからです。<sup>36</sup> となると兄弟が同じ相続分を分け持つことこそ最善で、いっそう義しいことでしょう。しかし次善として、一人あるいは別の人がいっそう多くのものを自分のものとしてしまふとしても、他の者たちが「[ ]」その一部分だけでも得るようにしなさい。しかしもし誰かがまったく皆の主人にならうとし、あの三番目や五番目<sup>37</sup>の分け前から兄弟をさまたげるなら、この者は残酷な独裁者、一致がたい蛮人、貪欲な野獣、食事においてもただ快樂のみを口の中に入れる者です。むしろその野獣たちよりもっと野獣的なのです。「なぜなら」もしオオカミがオオカミを生肉へと迎え入れると、この生肉の中で多くの犬どもは一つの肉体をひきちぎっていきます、しかし他方、満足しない者は同族の誰をも、その富の参加には招き入れはしない「からです」。適度な食卓があなたを満足させるのです。決して放蕩なフルコース料理の海原へと旅立つてはなりません。なぜならそのフルコース料理の中で難破した船は「救い」難く、海の底の岩で難破したのではないのですが、最深の闇の中へと追ひ立てられて、そこに落ち込んだ者はそこから出てくることはないでしょう。

## 八、貪欲の戒め

「用いなさい、しかし誤用してはならない」。パウロもこのようにあなたに教えていました。<sup>38</sup> 適度な享受に足りて、自己自身を解き放ちなさい。快樂に酔いしれてはならない。ありとあらゆる生物、つまり大小の四足動物、鳥や魚、そして獲得ししやすい動植物や珍種の動植物、また安いものや高価なものどもをただ破壊するだけの者となつてはなり

ません。たとえば多くの人手を使つても埋め立て「土砂」によつて満杯にならない底の深い井戸のように、汗をかきつつ多くの獲物で一つの胃袋を満たすようなことはしてはなりません。大食漢どもによつて大海の深淵は乱されることがないどころではなく、つまり水の中を泳ぐ魚だけ釣り上げられるのではなく、海底に生息する海の生き物もまた何であれこの空気の中へと陸揚げされます。牡蠣の種族も知られずにはすまず、「L. 105」ウニも捕獲され、ゆつたり泳ぐ烏賊は網に捕まり、蛸は釣られて岩から引き離され、また深海底の巻貝はもぎ取られます。波の上を漂つて姿が見えているもの、また海底に住まうよう定められているもの、こうしたあらゆる種類の生き物は、快樂主義者どもの企みが様々な罟を駆使することで、この空気中へもたらされるのです。

では、大食漢どものその次はどのようなものでしょうか。なぜなら、病氣のようはどこで生じようとも、悪は次々とその材料を引き寄せていくからです。それゆえ優美でシュバリス風(39)の食卓を備える者どもは、また必然的に、壮大な邸宅を用意し、有り余る財力を多くの屋敷と凝つた裝飾に費やすものです。加えて安樂椅子を好み、多彩な花飾りのついた衣装を身に纏い、高価な銀製の食卓をつくります。この食卓は表面がなめらかに処理され、また彫刻が施されており、そのため喉と同様に目でも様々な物語を楽しむことが出来るようになっていきます。さらに続くものを列挙しよう。ボウル、三脚台、壺、水差し、お盆、無数の広口の器、さらに道化、俳優、キタラ奏者、歌手、詩人、男女の奏樂者、踊り子、ありとあらゆる放蕩のかたまり、髪のかなめらかな少年、恥知らずの少女、無秩序に向かうヘロディアスの姉妹、この女こそヨハネを、即ち各人における神の姿をした愛知の理性を殺害するのです。(40)

## 九、追い払われる病気の貧者

[L. 106] これらすべては家を完成するものですが、その家の門前には無数の「ラザロ」たちが座しているのです。ある者はひどく傷を負い、別の者は目を切り取られ、他は足の不具を嘆き、中でもある者はまったく這うだけで、そのあらゆる部分を失ったことに耐えています。この人々は大声で叫ぶのですが、耳を傾けられることはありません。なぜなら笛の音や富者が自ら唄うことや大馬鹿笑いが妨げとなるからです。それでもさらに執拗にうるさがらせるなら、無情な主人の横柄な門番がどこからか出てきて棒を使つて追い払い、また犬を呼びよせ、鞭を使つてその傷を引つ掻くのです。そこでこれらキリストの友人たち、律法の要の者たちは、一片のパンも料理も得ることなく、理不尽な暴力と殴打を食らつたあげく立ち去っていきます。富（マモン）の巢穴の中で、一方の者どもは水が満杯になつた船のように食物をあふれさせ、他の者はコップを側において卓上に寝そべています。それゆえ恥知らずの家においてその罪は二重に住まうのです。即ち酔つ払いの飽食と、見過ごされた貧者の飢餓の二つです。

## 一〇、貧者嫌いへの報い

神がこれらを見ているとすれば、実際見ておられるのですが、あなたがた貧者嫌いども (μισοπτωχος) の生はどのような破滅に至ると考えるのでしょうか。述べてみなさい。それとも、こうしたことのために聖なる福音が、ありとあらゆる恐ろしい戦慄すべき図を大声で語り証言しているのを理解しないのでしょうか。つまり、まずかれらの重荷

が描かれるのだが、深淵の中で育てられ、悪の底なしの淵に包まれた者は「L. 107」吠えたて嘆くのです。さらに他の彼と同様に生きる者は予期せぬ死を宣告され、夕べに翌朝の鶯沢を望んでも夜明けの光を受けることはないのです。<sup>(4)</sup>信仰において死すべき者とならず、また享受において不死の者となつてはなりません。というのも、われわれにはすべてにおいて肉体のへつらいに迎合しようと欲する気持ちがあるからです。われわれはちようど跡継ぎのない家長、また大地のものの永久の主人のようです。夏に種まきのことを思い煩い、種まきの中に夏の喜びを望み、またプラタナスの木を植え、高くなつた木の陰を望みます。ヤシの木の実をしつかりと植え、甘い果実を待ち望みます。こうした結果はしばしば晩年において見出せます。晩年とは、人生の晩秋の訪れる時、死の冬が近づく時であり、そこでは人生にもう一年の周期も残らず、せいぜいあと三日、四日しか残されてはいません。

## 一一、むすび

理性あるわれわれは考えよう。われわれの人生は移りやすく、止まることない時間というものは、河の流れのように流れ、御しがたい。人生の中にあるものはすべてその消滅という目標に向かって追い立てられます。よつてどうか、この短く滅びの人生が咎を認められることのないように。刻々の時にあるものは不安定です。実にわれわれが述べる言葉の弁明も公平な法廷には役立ちません。それゆえ至福なる詩編作者もまた、いま述べたものと同じ想いに自らを高めて、自らの人生の終焉と定められた日を知ること望んだのでした。<sup>(4)</sup>残りの日がどれくらいかを教えてくださるよう神に懇願しなさい。「L. 108」それは出立の業に備え、旅の途中で必需品を求める用意の悪い旅行者のように、突



然慌でないためです。いずれにしても次のように述べられています。「主よ、私が自分に欠けるものを知るために、自分の限界と自分の日数がどれくらいなのかを知らしめてください。見よ、私の日々はもう少ししかなく、あなたの御前では私というものは無きに等しい」。よき魂の賢明な考えを見てください。しかもそれは王者の榮譽のうちにあります。なぜなら「そのような魂は」王の王、裁き手のなかの裁き手を鏡におけるように「はっきりと」見て、律法の完全な装いを求め、かの所でのいのちの完全で瑕疵なき市民として「この世から」旅立つからです。私どもすべては、私どもの主イエス・キリストの恵みと人間愛に拠ってそのいのちに与ることでしょう。栄光がイエス・キリストに世々に至るまで、アーメン。

### 註

- (1) Οι κάθαρκοί τῶν πτωγείων και μωσασμιῶν και μαρτυρίων ὑπὸ τῶν ἐν ἐκδόσει πάλαι ἐπισκόπων τῆν ἐξουσίαν κατὰ τῆν τῶν δυνάων παρέργων παρὰδοσει διαλεγέσασαν και μὴ κατὰ αὐθόρσειαν ἀδημιύτρωσαν τοῦ ἱεῖου ἐπισκόπου. E. Mühlhberg (ed.), Concilium Chalcedonense, in: Conciliorum oecumenicorum generaliumque decreta I. The Oecumenical Councils, Turnhout; Brepols, 2006, p.141.
- (2) その他「πτωγορροφείων(救貧施設)」「ἐνοβογείων(流浪者収容施設)」「νοσοκομείων(病院)」「κατασκώτων(休息所)」などの言葉が見出せる。  
ἡ κατασκώτων (休息所) とした言葉が見出せる。
- (3) T. S. Miller, The Birth of the Hospital in the

Byzantine Empire, Baltimore; The Johns Hopkins U. P., 1997 (esp. Ch. 5).

- (4) P. Brown, Poverty and Persuasion in Late Antiquity, The University of Wisconsin Press, 1992. ユーター・ハンソン、後藤篤子訳『古代から中世へ』山川出版社、二〇〇六年(特に「貧困とリダーシップ」)。大月康弘「ビザンツ国家と慈善施設—皇帝・教会・市民をめぐる救貧制度」、『長谷部史彦編著『中世環地中海圏都市の救貧』慶応義塾大学出版会、二〇〇四年、一〜四四頁。同氏「帝国と慈善ビザンツ」創文社、二〇〇五年。なお古代ローマにおける穀物の無料配給などの恵与とキリスト教における慈善とが根本的に異なることについては、ポール・ヴェーヌの

文献を参照)『パンと競技場』叢書ウニベルシタス六〇〇、法政大学出版局、三八―六七頁)。

- (5) 救貧に関するグレゴリオスの著作は、この他に「これら一人にしたことは私にしたこと」(in illud quatenus uni ex his fecistis mihi fecistis = De Pauperibus amandis oratio II)、『高利貸論』(Contra Usurarios)、『ネコ』、『祝福論』(De Beatiudinis) 第五講義がある。「高利貸し駁論」(たつては拙訳「論叢」玉川大学文学部紀要第四三号、二〇〇三年、五九―六九頁)を、また「これら一人にしたことは私にしたこと」(たつて)も拙訳(『神学研究』第五四号、二〇〇七年、一四七―一六一頁)を参照。また、これらとは別に拙著『司教と貧者』(新教出版社、二〇〇七年)も参照。
- (6) ネットはこの説教の本文(たつて以前単行本としても出版)の29 (Gregorii Nysseni de Pauperibus amandis orationes duo, Leiden; E. J. Brill, 1964)。使用した写本などにも若干の相違が見られるが、単行本にはラテン語による詳細な註釈が付けられている。
- (7) ラテン語訳は「シーニユ教父著作集」に掲載されている。十六世紀の Petrus Frascius Zinus のものがあろう。その語訳(たつて)は J. Fisch, *Über der Wohltätigkeit*, BKY 70, 195-226 を挙げてある。また英語訳(たつて)は S. R. Holman, *The Hungry Are Dying, Beggars and Bishops*
- (8) 写本は SZALFPH と表記される七つのものがあるが、写本についての説明は本文を掲載する著作集に付されたネットの解説に譲りた( GNO IX, pp.71-90)。
- (9) J. Danielou, *Chronologie des sermons de saint Grégoire de Nyse*, RevSR 29 (1955), pp.346-372, p.361。  
なお、三八二年というのは次のように説明される。三八二年一月一日の新年を祝う異教の祝祭に参加した民衆の無秩序を戒める一月二日の説教 (Adversus eos qui castigationes aegre ferunt) が残されている。その説教によると、混乱の生じた一月一日が土曜日であったという。これに該当する年が三八二年であり、この説教がこの年のものと推定される。そしてこの説教と説教「施し」の冒頭部分が重複していることから、「施し」も同年のものとして推定される。さらに「四旬節というのは、最初に述べられる「喉と腹の快楽欲を節制してきた」の一句から明らかになように、聴衆が断食を敢行している時期にこの説教がなされたこと、またそもそも倫理的訓導を行うのがこの時期にふさわしいからである。
- (10) κατά εποκορνή η της表現(たつて)は、他に『雅歌講話』第三講義 (GNO VI, p.96, 8) などにも見られ、ヘクスタシス論と関連する。なおこの εποκορνή(たつて)は、ストア派に

も同様の思想が見出せる (SVF III, 31, 3; 32, 42 et al.)。

- (11) 「愛智者の流儀」とは *epónos phálosophos* のこと。一見すると、キリスト教のギリシア化の一つと解されるが、ここでは愛智(哲学)が特定の思想、思潮をさすのではなく、内面的な事柄、魂の事柄に関わるものと理解をされていることに注意したい。それゆえ続いて「魂」「意図的な罪」「内的状態」が問題とされる。

- (12) すなわち肉の載っていない食卓のこと。断食の様子を示す。

- (13) 自由選択は *proaireseis* のこと。他の表現としては *proairetiki thymis, to afaireton, h afaireton proairese, to eph' hly, aubairetos proairese* などがある。ギリオスの著作に見られる。

- (14) こうした馬車の譬えは、プラトン『バイドロス』(246a)を想起させる。もともとプラトンでは四頭ではなく、駟者と二頭(理知的部分、気概の部分、欲望の部分)である。ちなみに戦車については『雅歌講話』(GNO VI, p.69, 5)や『純潔論』(GNO VIII, I, p.272, 13; p.332, 14)にも見出せる。

- (15) アリストテレス『形而上学』第四卷一章(1013a4f)を参照。同様の議論はバシレイオスにも見出せる (PG29, 16A)。

- (16) マルコ福音書一四章六五節、ヨハネ福音書一八章二二節

ニュッサのグレゴリオスによる説教「施し」(土井)

を参照。

- (17) 「」に示したイザヤ書からの引用は、順番に、五八章四節、同章六節、同章七節である。

- (18) 「僕の言葉」とは、ここで語るグレゴリオスの言葉のこと。「なお辞典によると *teugos* と *teugis* の相違は、前者が「物乞い」であるのに対し、後者は「生活のための労働者」「日雇いの労働者」(Liddle and Scott and Jones)とされる。しかしこのでの用法を見ると、*teugis* はひょとなく「物乞い」、*teugos* はその中でも「病弱で寝たまりの人々」ということになる。

- (20) ここでは貧者について「宝」「黄金」「健康」「保証」といったイメージで捉えられているのが興味深い。またこの説教でとくに強調されるのは、貧者について同じ人間としての「兄弟」(*adelphos*)ということであり、この表現は散見される。

- (21) 旧約外典「ベルと竜」三三節〜三九節を参照。なお「貧者への愛」(*philonetia*)の関連語はキリスト教的であって、グレゴリオスの時代まで、キリスト教文学の外でこの言葉を使った例を確認することは出来ない。

- (22) 出エジプト記三三章五節以下を参照。

- (23) マルコ福音書一四章二節以下を参照。

- (24) マタイ福音書二五章四〇節などを敷衍したもの。

- (25) ここに見られる「貧者嫌悪」と「人間嫌悪」の等価視か

- らも推し量ることができるように、この説教では、「人間愛」―「人間嫌悪」の対比と「貧者への愛」―「貧者嫌い」の対比が重ねられている。つまり「人間愛」Ⅱ「貧者への愛」―「人間嫌悪」Ⅱ「貧者嫌い」となる。ギリシア文学において「人間愛」における愛の主体が「神」からはじまり様々な用法が見られる一方で、キリスト教思想では特にその客体、つまり愛される「人間」が問題となる。ここに見られる「貧者」、また「敵」など、従来は対象外とされていた人々が人間愛の対象として、つまり「人間」として強調される。その例は偽クレメンス文書の『講話集』に見られるフィランソロピア論にも認められる(土井健司「他者論としてのフィランソロピア」、三井善止編著『他者のロゴスとパトス』玉川大学出版部、二〇〇六年、一三九―一六〇頁を参照)。
- (26) 使徒言行録一章二四節、一五章八節を参照。
- (27) マタイ福音書二五章三一節以下を参照。
- (28) 神が万物を創造したのはご自身のためではなく、人間のためであるとの思想は教父において一般に見られる。しかし後に「万物は決してわれわれのものではない」と述べられるように、それは単純に人間中心主義というわけではない。むしろここでの強調点は人間に対する神の恵みにある。土井健司「ギリシア教父と自然世界―サクラメンタルな自然観と人間中心主義」、聖学院大学総合研究所紀要第17号、二〇〇〇年、二九八―三三三頁、同「神は万物を人間のために造った―オリゲネスにおける神の人格性の一断面」、『愛と意志と生成の神』所収、教文館、二〇〇五年、一二五―一四七頁を参照。
- (29) イザヤ書五五章一〇節を参照。
- (30) 神が様々なものの「発見者」であることについては、バルク書三章三二節―三七節を参照。
- (31) 先に論じられたマタイ福音書二五章四〇節以下のこと。
- (32) 神が万物、技術を見出した方であり、同時にそれらを人間に付与して下さる方であることの二つは、いわば表裏一体のものと捉えられている点が興味深い。神はただ創造し見出すだけではないという。
- (33) この一文は、「人間が人間を眺めている」(ἀναβουνοῦσθαι ἀνθρώπου)と記され、続いて眺められている人間がどのような者が修飾語句として描かれている。つまり、人間である富者が同じ人間である貧者を無情にも眺めていることが咎められている。ここにフィランソロピアとミサンソロピアの対比も認められる。
- (34) マタイ福音書五章一七節を参照。
- (35) この一文では二つの結びつき、すなわち、施しという行為と「神化」の思想の結びつき、そして施す神という觀念と「第一の混じり気のない、そしてすべての知性を超えて行く存在」というギリシア哲学的な神觀念との結びつきの二つが述べられている。最初の結びつきは神の模倣と解さ

れるが、第二の結びつきは神論の問題として興味深い。

- (36) 影響関係は不明であるが、父なる神の下での万人の同胞という思想がエピクテトスにも見られる (Epist. 1.33.34)。
- (37) なぜ「三番目か五番目」なのかは不明。校訂者ヘックもその注解において不明とする (Heck, Gregorij: Nysseni De Pauperibus Amandis Orationes Duo, p.93)。
- (38) おそらく第一コリント書七章三二節のこと。
- (39) 「シュバリス風」とは贅沢を象徴する表現。シュバリスは紀元前七二〇年頃に建設された、南イタリアにあつたギリシア人植民都市のことで、その住民の贅沢さ、豪華さはギリシア文学において贅沢の代名詞となつていた。
- (40) 洗礼者ヨハネに言及されるが、マタイ伝一四章一節〜二節（一部ルカ伝三章一九節）を参照。もつともヨハネの殺害を求めたのはヘロディアスの姉妹ではなく、娘 (Suzanna) である。おそらくグレゴリオスの記憶違いであろう。
- (41) ルカ福音書一六章一九節〜三二節の「ラザロと金持ち」に登場するラザロのこと。
- (42) こうした記述から、この人々が「レプラ」または「エンファンティアシス」と呼ばれる病気を患う貧者であつたと推定される。
- (43) ルカ福音書一六章一九節〜三二節の「ラザロと金持ち」を敷衍する。

ニュッサのグレゴリオスによる説教「施し」(土井)

(44) 詩編九〇編九節〜二二節を参照。

(45) 詩編三八編五節〜六節を参照。

本稿は、平成一七年より交付されている科研費基盤研究(C)「古代地中海世界の多元的状況とキリスト教の形成」(代表片柳榮一)の研究成果の一部である。